



## 現代学生百人一首

まずは引用。12日（土）の朝日新聞「天声人語」から。

\*

青春のとき、夢もあれば不安もある。〈難しいと言われて燃える夢があるいつか作る機械の義手を〉。広島工業高校2年大畑遼真（りょうま）君が詠んだ。長崎農業高校3年芦塚俊介君は〈柿や蜜柑（みかん）栗などザルに盛られてる就活の僕もザルに盛られる〉

▼毎年この季節、東洋大学から届く「現代学生百人一首」を楽しみにしている。26回目の今年全国から約5万4千首が寄せられたそうだ。どんな時代でも若さは宝だと、つくづく思う。

▼〈過ぎてゆく高二の夏を止めたくて朝顔一つ押し花にする〉鈴木亜矢子。青春の逃げ足はいつも速い。〈朝早くカーテン開けて光合成力満ちたらさぁ出かけよう〉高1、唐澤春奈。

▼政治に向く目に風刺がまじる。〈弟がテレビを見ながら僕に問う今年の総理は誰になるのと〉高2、正木雄介。ネット時代を見る目も冷静で的確だ。〈「詳しくはウェブで」とうたうCMは情報社会の格差広げる〉高1、木村紗和音（さわね）。

▼家族のありがたみは家を出てわかる。〈「おかえり」がこんなうれしい言葉とは初めて知った寮に入って〉高2、高橋香那。遠くで働く親を思いやって〈四季のない異国の父へ秋便り庭の紅葉（もみじ）の押し葉のしおり〉

高3、井上裕衣（ゆい）。

▼年若いほど発想は自在だ。〈えんぴつがぐるりぐるりとダンス中白いステージ中間考査〉中3、下迫仁子（ひろこ）。さて試験の結果は？ 小学生の部に〈そよ風にたんぽぽみんな言っている種（たね）をたく配してちょうだい〉6年、本木万葉（まよ）。読み終えて、春に一步近づく気がした。

\*

記事にあるとおり、東洋大学が学生の短歌を募集して26年、国語科にも毎年優秀作を冊子にまとめたものが送られてきて、私もそれを読むのを楽しみにしている。（今年のもはまだ送られてきていないが…）

短歌は定型である。定型であることを拘束と感じる人もいるが、定型であるからこそ、その中にどれだけ「自分」を詰め込むことができるのかが光るのである。型が決まっています、誰でもが同じフォーマットを踏まえざるをえないからこそ、つまり、同じ土俵に立たざるをえないからこそ、その土俵の中での技がきっちりと見えてくるというわけである。

〈ぐるりぐるりとダンス中〉とは、なんと優雅な考査であろう。まるで考査の時間を楽しんでいるかのような、ゆったりとした時の流れが感じられる。

ある日、本のページの間に押し花を見つけた時、きっと作者は〈高二の夏〉を思い出すのであろう。いったいその本は何なのだろう？ 日比谷生なら「サクシード」といったところか（笑）。